

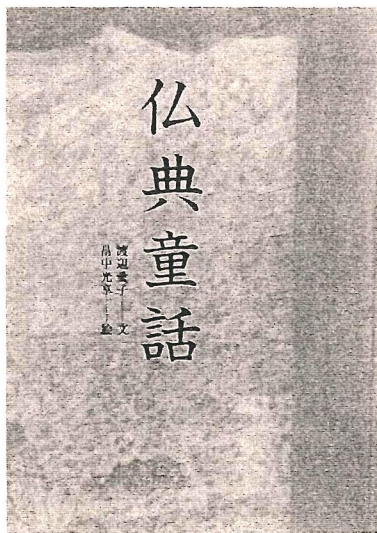
絵本の紹介 (東本願寺文庫 不松下 蓮)



『あかてめぐいのおくさんと7にんのなかま』
イ・ヨンギョン ぶんえ かみゆにじせく
福音館書店
お裁縫の7つ道具「毛のさし」「はさみ」「はり」「いと」
「ゆみぬき」「のしごて」「ひのし」。みんな自分がいち
ばん役に立つと言います。あかてめぐいのおくさん
は、そんな7人に「おたしがいちばんえらいんだよ
と大きな声。みんなはしよんまり... そんなおくさん
が夢をみて...。みんな1人1人たいじつな
役目があるよと教えてくれます。韓国の道具が
美しく描かれています。

『はなのすきなうし』 おはなし マンロー・リーフ
エ ロバト・ローソン やく光吉夏弥 岩波書店

みなさんおなじみの読みつづがれる古典。
ふとしたトラブルで闘牛場につれいかれた
フェルジナンド。まんとうは花の1においをかいて
ゆったりすずすのが大女子きなのですが...。
スペインの人々が熱狂する闘牛と、おだやかな
じでマイペースなフェルジナンド。この対比が
読み手や聞き手の心をほろりとさせてくれます。



『仏典童話』 渡辺愛子 文 島中光亨 絵
東本願寺出版

何百というお経の中には、仏教の教えを物語の形で
伝えられるものがたくさんあります。その中から十話を
紹介しています。

死んだ子どもを抱え、おしめか不氣に「この子を助けて下さい」と
お願いする母親。おしめか不氣は「死んだ者のいない家
に行き、けしの種をもらってきなさい」と言います。母親
はそういう家をたずね歩きますが...。(第五話「けしの種」
すべての人間に「真実」とは何かを問いかける物語。

(パートIIもあります)

〈カエルの本〉

かえるは本の中だけでなく、おもちゃや歌などにも多く登場するので、こどもたちには身近な生き物ですが、実際に手のひらにのせるような体験は少なくなっているように思います。

『アマガエルとくらす』は20年近く前に出版されている本ですが、14年もの間飼っていた、アマガエルのようすが詳しく書かれています。脱皮や冬眠のこと、音に敏感なことなどなど、これを読んで私は初めて知りました。片山健さんの絵だけを追っていても楽しくなる本です。



山内祥子文
片山健絵
福音館書店 1999



『オタマジャクシをそだてよう』には池からすくってきたカエルのたまごがおたまじゃくしになり、エラがとれて足ができてきてカエルになるようすがのびのびと大きく描かれていて、飼ってみたい、この目でみてみたいと思ってしまう。

アリソン・バートレット え ビビアン・フレンチぶん
山口文生やく 評論社 2000



本物のカエルには抵抗があるひとには、32回も『かえる』が出てくる本『カエルが見える』はいかがでしょう。「かえる〇×××」という短文の1文字の助詞と3文字の動詞（たまに名詞）をいれかえることば遊びの本です。ことばの羅列のようできて、大きくお話がつながっていることが、絵でわかります。

まつおかきょうこ さく
馬場のぼる え
こぐま社 1975

『ゆかいなかえる』はこれなら王子さまになれるるかもと思わせるような素敵な容姿の4匹のかえるです。探し絵の楽しさがあり、さりげなくかえるの生態も描かれています。



『かえるの平家ものがたり』は本家を知らなくても、知っているときっともとおもしろい絵本です。見開き60センチ幅に描かれた源氏がえる1万匹と、平家ねこ1匹の戦いは…。

ジュリエット・キープスぶん・え
いしいももこ やく福音館 1964

日野十成文 斎藤隆夫絵 福音館書店 2002

太田一子

【いろいろな「7」】

「7」のつく言葉は、気がつけば身の回りにたくさんあります。七不思議、七光り、七つ道具、ラッキーセブン、七色の虹・・・

キリスト教圏では「7」は神聖な数字。日本での「7」は“たくさん”とか“いろいろな”という意味もあるようです。7月にちなみ、「7」の本を集めました。



『しちどぎつね』(たじまゆきひこ くもん出版 2008年)

ひとたび人にあだをされたら七度だまして返すという七度狐。大阪から伊勢参りの旅に出かけた二人連れがこの狐に次々と化かされていきます。たじまゆきひこさんの型染めならではの大胆で動きのある構図と色使いがお話を引き立てます。

『たこのななちゃん』(なかがわちひろ/さく・え 徳間書店 1997年)

かなこは船長のお父さんからおみやげにもらった七本足のたこの子に「ななちゃん」と名前をつけて、毎日一緒に過ごします。

でも、やがて別れが...

この絵本を読んでいくうちに、子どもたちはいつしか自分をかなこに重ね合わせていくのでは。



『七ひきのねずみ』(エド・ヤング/作 藤本朝巳/訳 古今社 1999年)

七ひきのねずみがある日、大きな「何か」に出会い、一匹ずつ、それが何なのかを見に行きます。月曜日から一週間(7日間)かけて、最後にはその答えが判明。

一部分だけを見ないで全体を見ることの大切さもコミカルに問いかけています。絵も色もことばも、全てシンプルで鮮明。ねずみの細かな動きも見えてほしいです。

『えびすさんと6人のなかまたち』 七福神ものがたり①

(中川ひろたか/作 井上洋介/絵 福音館書店 2004年)

いつものように釣りをしていると、見たこともないような、大きな鯛を釣ったえびすさん。その鯛に「あなたはこれから大きな船(宝船)に乗って他の6人を探し、幸せな世の中を作るのです。」と言われます。

七福神ってどんな神様?どんなふうに乗りに乗って来るの?

墨絵のような筆使いと少しおどけた会話がおもしろい絵本です。

力強い船出に勇気が湧いてきます。



【今がどんな状況であれ、人には必ず母がいます。母子の愛を感じる本をご紹介します】

個人会員 川勝久美

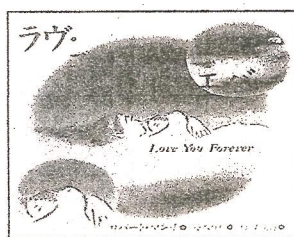
『ぼくにげちゃうよ』

マーガレット・W・ブラウン／ぶん クレメント・ハード／え ほるぷ出版



あるひ、こうさぎはいえをでてどこかへいってみたいくなりました。そこで、かあさんうさぎに「ぼくにげちゃうよ」といいました。こうさぎはつぎつぎにいろんなものになってにげますが、かあさんうさぎはかならず・・・かならずぼうやをつかまえにいくのです。

『ラヴ・ユー・フォーエバー』 ロバート・マンチ／さく 梅田俊作／え 岩崎書店



母にとってわが子はいつまでたっても可愛いもの。少し大きくなっていたずらっ子になっても、もう少し大きくなってへんなものにはまり、もっと大きくなって一人前の大人になっても。そして年老いた母は大人になった子どもと逆の立場になっていき・・・

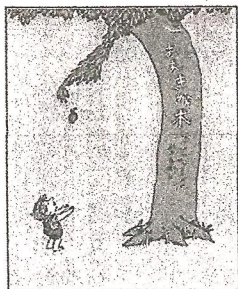
『きつねとぶどう』 坪田譲治／さく 黒井健／え 講談社のおはなし絵本館9 講談社



おなかをすかせたこぎつねに、ぶどうをとってこようとでかけたおかあさんぎつね。もうすこしでこぎつねのところへかえりつくときにりょうしがやってきて、はやくにげなさいとさけんでこぎつねをにがします。おおきくなったこぎつねは、一本のぶどうの木をみつけ、そこにはぶどうがなっているわけをしるのです。

『おおきな木』

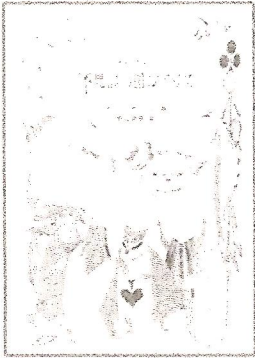
シェル・シルヴァスタイン／さく 村上春樹／訳 あすなろ書房



一本の木がありました。木はひとりの少年が大好きでした。少年もこの木が大好きでした。毎日少年は木のところにやってきてあそびました。少年は大きくなりました。たまに来る少年に木は、その時少年がほしいと言うものを与えます。与え続けても木はそれではあわせなのでした。

ぞうさん
まど・みちお
ぞうさん
ぞうさん
おはなが
ながいのね
そうよ
かあさんも
ながいのよ
ぞうさん
ぞうさん
だあれが
すきな
あのね
かあさんが
すきな
のよ

文庫のお楽しみ会、<ばらのブローチ作り>の時に、「ばら」つながりで紹介した本から…



『不思議の国のアリス』 ルイス・キャロル トーベ・ヤンソン 絵
村山 由佳 訳 KADOKAWA メディアファクトリー 2006.3.3

この物語って、読んだつもりでいるけれど、そうでもない気がするし、トーベ・ヤンソンのムーミンも、アニメのイメージが頭の中に出来上がっているし、テレビや映画で接してしまっているものって、手に取って読むことを遠ざけてしまってるなあと感じます。訳者のあとがきにもあるように、キャロルがアリスに語りかけるような文体なのと、帽子屋がとても流暢な関西弁なので(笑)、読みやすくておもしろかったです。好みはあるでしょうけれど。

『ふしぎの国のアリスの算数パズル』 ルイス・キャロル作『ふしぎの国のアリス』をもとにして
山崎 直美 著・訳 さ・え・ら書房 1983.10

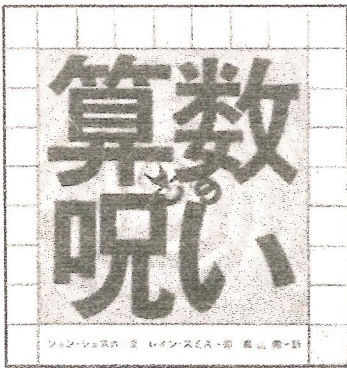
うちの文庫でよく手に取られるけれど、残念なことに借りられない本です。「-パズル」という題名から、レクリエーションの本だと思いたいけれど、中味は論理パズルなので「むずかしい」という感想ばかり。でも、小学校中学年でも、よく読むと答えがちやんとわかる内容です。『ふしぎの国のアリス』の物語の大すじも書かれていますし、ルイス・キャロルは数学者なので、自身の著作からの文もコラムとして収められています。表紙・挿絵はジョン・テニエルのものが使われています。

アリスの算数パズル



ということで、算数・数学でつなげていきます。 ————— ≤ + > % - < × π ≥ ÷ —————

『算数ののろい』 ジョン・シェスカ=文 レイン・スミス=絵
青山 南=訳 小峰書店 1999.1.12



「みなさん、たいていのことは、算数の問題としてかんがえられるんですよ」と、フィボナッチ先生(名前がいかにも数学者)が、呪いの言葉を使った。朝起きてから、学校の授業も、休み時間も昼食も…算数の問題だらけ。単位の換算、グラフの読み方、十進法、4進法、バイナリー、フィボナッチ数列、ものの数え方はいくつも種類があるということは勉強になりますし、どうでもいいことを聞いている問題が出てくるところが笑える絵本です

『あたまのうえに りんごがいくつ』 セオ・レスィーグ作 / ロイ・マッキー絵
たむら りゅういち訳 ペンギン社 1984.1

登場する動物たちが、頭の上のにせたりんごを1こ、2こ…と増やしなが、なわとびをしたりスケートをしたりして10こになった! 追っかけられて、荷車にぶつかって、おおさわぎ! の結末が、とっても愉快的な絵本です。リズム感のある文章は訳者のセンスでしょうけれど、作者(別名ドクター・スース)の原文のリズムもきっと、このように楽しいと思います。



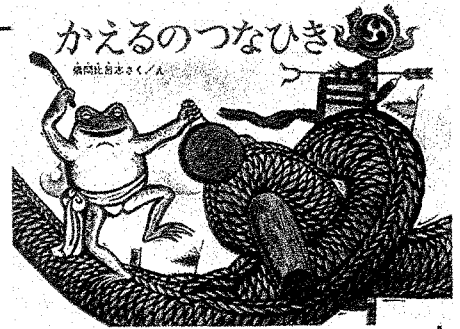
<このはな文庫 鈴木 美和>

今年のクリスマス会で、もみじ文庫は沖縄のお話を大型しかけ紙芝居にして、みなさんに見ていただくことにしました。ちょうど、沖縄の絵本に深い繋がりのある儀間比呂志さんの版画展も開催中。そこで沖縄の絵本をご紹介しますことにしました。<もみじ文庫 堂腰清美>

『かえるのつなひき』 儀間比呂志 さく/え

福音館書店 ・1972、1998

田んぼの稲に悪い虫がたくさん湧いて・・・ほっておいたら、島中の田んぼに広がるかも・・・王様は「村全体の稲を焼き払え・・・」と命令。村の人たちは困ったこまった。でも王様の命令は絶対。村の田んぼのかえるたちも困ったこまった。ものしりの「としよりがえる」の提案でつなひきが行われることに。今や那覇市の大イベントとなっている大綱引き。17世紀から始まったと言われる那覇の綱引きにまつわる昔話。絵本も版画もあわせてお楽しみください。



りゅうとドラゴンフルーツ

文 戸田真知子 絵 上原えり



『りゅうとドラゴンフルーツ』 自費出版

文・戸田真知子 絵・上原えり

幼いりゅうの子はおかあさんと別れて、空を飛ぶ龍になるために一人でドラゴンフルーツの実を探す旅に出かけます。

「りゅうのおきて」で、どこにあるか、どんな実なのかは教えてもらえません。ヤンバルの森の中で知り合った仲間たちに助けられながら、りゅうの子はドラゴンフルーツの実を探し続けます。

さて、空を飛べる龍になれるかしら？

お話の結末が気になる方は、もみじ文庫のクリスマス会へどうぞ。

もみじ文庫のある右京区の集合住宅にお住まいの戸田さん（母上）と沖縄にご在住の上原さん（娘さん）の絵本を、今年はクリスマス会の大型しかけ紙芝居の題材として、使わせていただくことになりました。

この絵本を読みたいと思われる方は市庫連を通じて、もみじ文庫までご連絡ください。りゅうの子を始め、ヤンバルクイナ、やまねこなどの動物や、ゴーヤ、マンゴーなどの食べ物が出てくるかわいいお話です。



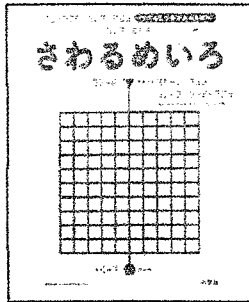
『ぼくたち、ここにいるよ 高江の森の小さいのち』 影書房

写真・文 アキノ隊員 (宮城秋乃)

亜熱帯生常緑広葉樹林が良好な状態で残されている沖縄本島北部の深い森・やんばる。やんばるの地区で調査研究を続けるチョウ類研究者がたくさんの写真と分かり易い説明で、昆虫、蛙、へび、鳥などを紹介。ともかく、美しく愛おしい。科学絵本を苦手とする私が見入ってしまった・・・その美しい貴重な自然が「深い森の中に木が切り倒された空間が現れた！」ことで失われようとしている。その「空間」とは米軍のヘリパッド建設現場。絵本の最後の写真は、米軍北部訓練場のフェンスの前を歩くヤンバルクイナ。ともかく難しいことを考えなくていいから、この絵本の美しい自然の写真を皆さんにたのしんでもらいたい。



ユニバーサルデザイン絵本



「さわるめいろ」 村山純子 小学館 2013

表紙に「てんじつきさわるえほん」とあり、全ての文字に点字がそえられ、視覚に障害がある人を意識した本作りがされています。

頁毎に和風の文様が太く美しい単色の線で描かれていて、一見すると着物や風呂敷の柄の見本帳のようにも思えます。「どこが迷路なのか？」そんな気持ちが湧いてきます。描かれた線が浮き上がって見えるので、自然とさわる気になります。そして触って初めてそこに迷路があることに気づきます。

描かれた線の上に立体的な点がある場所とない場所があり、文様の上部にある三角印のスタート地点から点がつながったところをたどってゴールの丸印を目指す迷路になっているのです。

障害のある人もない人も共に利用しやすいことを目指したユニバーサルデザインの考え方をもとに作られたと思われまます。

夫が視覚障害者である私は、この本を知って嬉しくなって買い、夫に触らせ、夫もとても楽しんで人にも紹介していましたが、その間ずっと私は「絵本」というものについて考えていました。やはり「絵本」というものはあくまでも晴眼者(視覚に障害がない人のこと)のものではないのかと。

晴眼者である私がこの「さわるめいろ」を面白いと思ったのは、視覚から得られた情報(文様)と触覚から得られた情報(迷路)にズレがあるところでした。夫にこのズレを説明したところ、晴眼者と同じように楽しめないのならユニバーサルではない(彼の個人的見解です)と不満げでしたが、視覚以外の感覚について考えるひとつの機会になるなら意味のある良い絵本と言えるでしょう。

厚紙を折りたたんだような装丁や、目に飛び込んでくる文様の色彩と触り心地に並々ならぬこだわりを感じる本です。一度手に取って、是非このズレを感じて、感じられる幸せに気づいて欲しいと思います。



『チョキチョキチョッキン』
ひぐちみちこ・いわたみつこ作
こぐま社 1996



『ねえ おそらのあれなあに？』
ほしのかたりべさく
みつい やすし絵
NPO 法人
ユニバーサルデザイン絵本センター
2010

いつのように娘と読む絵本。

でも楽しみ方が少し違います。

点字への興味。立体的な絵をさわる楽しさ。

更に、目を閉じた時に浮かぶ光景—海の色は？カニさんの表情は？星の数、光の放ち方、星空を見上げる親子の姿は？—が読む人によって違うことに気づく時、そこに点字絵本の大きな魅力を感じます。

そして絵本を読み終えた後、そんな楽しさを誰かと共有したくなる、そこに点字絵本の醍醐味があるように思います。

『チョキチョキチョッキン』ではカニがハサミを使い、紙でいろいろな生き物を作りながら仲良くなっていく様子が、『ねえおそらのあれなあに？』では違う場所で星空を見上げながらも、やさしい親子の会話から感じられる愛情が、読む人の心を温かく包んでくれます。

私も娘も点字は読めませんが、「点字の絵本」と身構えることなく接することのできる絵本でした。

其枝なかよし文庫 福岡靖子

新年おめでとうございます。今年も心豊かに過ごせる1年でありますように。どうぞ、よろしくお願ひいたします。いよいよ風邪やインフルエンザの本格的な季節の到来です。今年こそ、わが家にインフルエンザがやってきませんように。寒いこの時期におすすめの絵本を紹介します。

『あたしもひょうきになりたいな!』

(フランデンバグ夫妻/作・絵 福本友美子/訳 偕成社 1983)

弟のエドワードが病気になりました。弟はベッドでごはんを食べたり、おばあちゃんに本を読んでもらったり、やさしくされているのを見て、自分も病気になりたいエリザベス。うらやましがりやの幼児の気持ちを描いた絵本です。



『ぼくひょうきじゃないよ』

(角野栄子/作 垂石眞子/絵 福音館書店 1989)

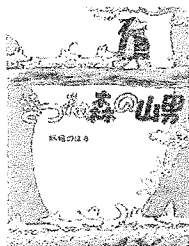
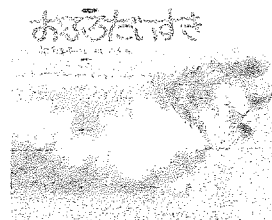
今度は病気になりたくない男の子のお話です。明日はとても楽しみにしている釣りの日なのに、ケンはず熱が出て、布団に寝かされてしまいます。すると、ドアをとんとんとたたいて、白いお医者さんの服を着た大きなクマが入ってきました。病気じゃないと言い張ったケンも、クマ先生の言うことを聞いて、クマ式うがいをして、クマ先生におでこをなめてもらい、布団の中に息を吹き込んでもらうと・・・。



『おふろだいすき』

(松岡享子/作 林明子/絵 福音館書店 1982)

寒い日はあったかいおふろが恋しくなりますね。男の子が1人でおふろに入っていると、かめやペンギン、オットセイが次々に現われます。かばの体をごしごし洗っていると、最後に顔を出したのは、なんと大きなクジラ。みんなでお湯につかって、数を数える光景はとても楽しそうで、一緒に入りたくなります。



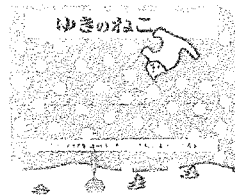
『きつね森の山男』 (馬場のぼる/作 こぐま社 1974)

ふとしたことから、きつねの森に住むことになった力持ちの山男は、きつねの毛皮が欲しい寒がりの殿様と戦うことに。山男はきつねを助け、寒がりのお殿様には、得意のふろふき大根をごちそうします。寒い冬にこの本を読むと、ふろふき大根を食べたくなります。大根があまり好きでない子どももこれを読むと、ふろふき大根が食べたくなるかも。

『ゆきのねこ』

(ダイヤルコー・カルサ/作 あきのしょういちろう/訳 童話館出版 1995)

たったひとりで生活をしているエルシーは、ある夜「かわいくて大きなねこをおつかわしてください」と神様にお願ひしました。朝になると、雪でできた大きなねこが現れ大喜び。しかし「けっして、ゆきのねこを家に入れてはならない」という神さまとの約束を破り、ねこを暖かい家に入れてしまい、ねこは溶けてしまいます。唯一の友だちを失って、とても悲しんだエルシーですが・・・。



ここで紹介した5冊の絵本にはいろいろな動物が出てきます。

十二支になれなかった、ねこ、くま、きつね、かばたちもここでは主役です。

(風の子文庫 河前幸子 河邑真理)

<訂正とお詫び>

先月号付録の左頁『さわるめいろう』(村山純子 小学館)の紹介者はわたぼうし文庫 吉川匡子さんでした。大変失礼いたしました。(編集部)

推薦本コーナー

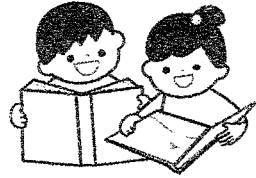
よみきかせサークル「はらぺこあおむし」

代表 石原 佑季

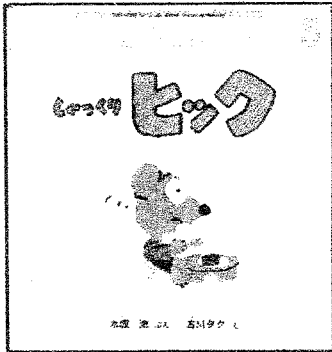
こんにちは！私たち「はらぺこあおむし」は、向日市立第5向陽小学校の保護者（OBを含む）による、よみきかせサークルです。2018年で活動25年目を迎えます。

主な活動は、月に1度、主に1・2年生と特別支援学級の児童にお話会を実施する事です。

今回は「我が子のお気に入り本」を含むおすすめ本をメンバーの皆さんに紹介してもらいました。



～ 幼 児 む け ～



「しゃっくりヒック」～こどものとも年少版5～

木坂涼 作 古川タク 絵 (福音館)

しゃっくりが止まらないこぐまくん、どうやったら止められるか、ねずみくんやこぶたくんに聞きに行きます。みんなはいろんなしゃっくりを止める方法を教えてくれるのですが…娘が幼稚園の頃に大好きだった絵本です。子どもと一緒に、こぐまくんのしゃっくりやしゃっくりを止めるポーズを真似しながら楽しんでください(^_^)

「よるくま」

酒井駒子 作 (偕成社)

私の娘が幼いころ寝る前の絵本タイムに好んでいた絵本です。

ある夜ぼくのドアをノックした「よるくま」。「目が覚めたらママがいないの」というよるくまと一緒にママを探しにいく、すこし幻想的なお話。

親子ともにやさしい気持ちで眠りにつくことができた幸せな記憶とともにある、素敵な絵本です。



～ 小学生むけ ～

「 竜退治の騎士になる方法 」

「 ふしぎの時間割 」

ともに 岡田淳 著 (偕成社)

今でもそこそこ本を読む息子が、最初に読んだいわゆる「字が小さくて長い本」が「竜退治の騎士になる方法/岡田淳」でした。小学3年生くらいだったと思います。何がそんなにおもしろいの?という勢いで一気に読み終わりました。この本を皮切りに、まずは岡田淳さんの本を片っ端から読み続け、そこから自然に他の色々な文庫本へと進みました。



それから数年後、今度はほとんど本を読まない娘が小学4年生のころ、なぜ選んだのかわかりませんが岡田淳さんの「ふしぎの時間割」を読んでいた。字が小さくて分厚いにもかかわらず一気に読み、少し日にちをおいてまた読むのです。あの頃から6年経ちましたが、先日も久しぶりに読みたいと言います。息子の沢山の本との出会いのスタートも、本好きではない娘もはまる岡田淳さんの本。あらためて、本当に子どもたちのそばにいる作家さんなんだなあとおもいます。

～ 中学生むけ ～

「 どこ行くの、パパ? 」

ジャン=ルイ・フルニエ 著 河野万里子 訳 (白水社)

重度の障害を持った子供、と聞いて何を思い浮かべますか。この本の著者は、フランスのテレビ業界で大活躍していましたが、その裏では二人の障害を持った息子を抱え、苦悩してしていました。これはそんな父親が綴った、愛と、後悔と、ユーモアに満ちた自伝的小説です。



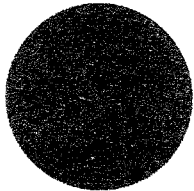
「 眠れる分度器 」 ～「はじめての文学 山田詠美」より～

山田詠美 著 (文藝春秋)

“時間の流れに沿って泳いでいけば、たちまち、同種の人間たちに出会うだろうという確信に近いものをもたらした。”

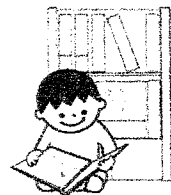
強烈なフレーズじゃありませんか?今いる場所に窮屈さを感じる人に、こっそりオススメしたい一冊です。

文藝春秋出版の『はじめての文学 山田詠美』に収録されています。少し大人向けの短編集なので、まだまだ子供でいたい人は読まないでください。



山田詠美

懐かしい本、子どもたちにも読んでほしい本…
こたつに入りながらの冬読書のひとときにいかがですか?



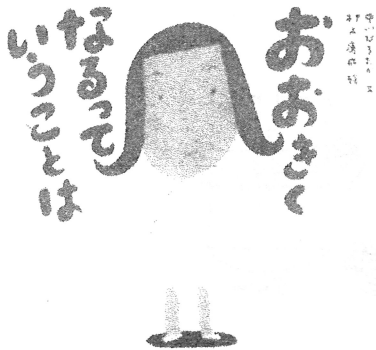
まだまだ風は冷たいけれど、晴れた日の陽射しの明るさは“春”ですね。

ロウバイ、梅、スイセン、沈丁花… 庭先からふと漂う花の香りにホッと和みます。今春進級進学される皆さん、おめでとうございます。新たなよい出会いにたくさん恵まれますように。子どもたちの成長著しいこの季節にぴったりな一冊です。



『おおきくなるっていうことは』

(中川ひろたか/作 村上康成/絵 童心社 1999)



おとなは「おおきくなったね～」と子どもたちに声をかけてしまいがちですが、子どもって、自分ではぴんとこないこともあると思います。

「おおきくなるっていうことは…

洋服が小さくなるっていうこと、
新しい歯が生えてくるっていうこと、
水に顔を長くつけられるってこと、
あんまり泣かないっていうこと…」

この本には、おおきくなるっていうことはどんなことかが、子どもの視点で、共感できるように書かれています。

「おおきくなるっていうことは たかいところからとびおられるってこと」

「とびおりても だいじょうぶかどうか かんがえられるってこと」

まだ小さな赤ちゃんが、くるりと後ろ向きになって段差を降りる姿を見ると、「あ、ちゃんとわかってるな～」と思わず笑みがこぼれ、自分で学んで少しずつ大きくなっているんだなあと思います。一番幼かった子が、小さな子の手を繋いであげたり、絵本を読んであげる姿を見かけるときには、「おおきくなるっていうことは ちいさなひとにやさしくなれるってこと」というフレーズが心に響いてくるのです。

この本、実はおとなが読んでも意味深いメッセージがいっぱい。年を重ねることが素敵なことだと発見できるんですよ。桜が咲くと、またみんな自分のペースで一つおおきくなる春。子どもたちの成長をいっぱいほめてあげましょう。

(下鴨子ども文庫 余田由香利)